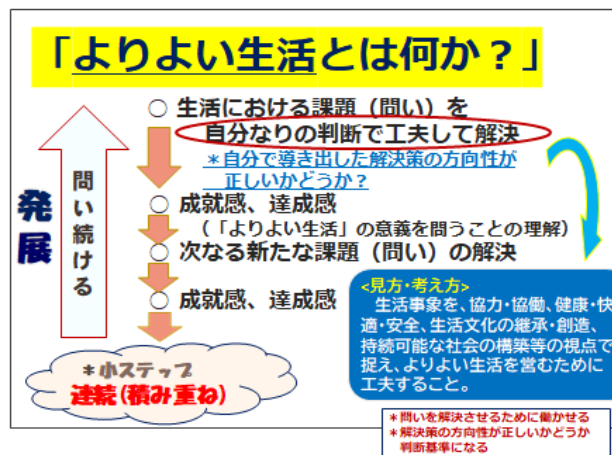


1 技術・家庭科（家庭分野）が目指す「夢中になって問い続ける生徒」とは

「夢中になって問い続ける生徒」の育成のためには、自らの問いを持って探究していく姿勢が必要だと考えます。家庭分野は、よりよい生活を目指した主体的な生活者を育成することを目標としています。しかし、目指すべき「よりよい生活」は、生涯を通じて一定ではありません。状況や立場、年齢や時代に応じて変化するものであり、自分にとって「よりよい生活とは何か」と絶えず問い続けなければならないテーマであると考えます。

さらに、「よりよい生活とは何か」という大きなテーマを問い始めることは容易ではありません。まずは、小さな問いを解決するという小ステップが必要だと考えます。その小ステップというのは、家庭分野においては生活における課題解決の場面にあたります。日常生活の様々な問題を解決するために、身に付けた力を生かして、生活をよりよくしていこうとすることです。課題を解決して生活が豊かになったことを実感できると、達成感や成徳感を得るだけでなく、「よりよい生活」を問うことの意義を理解することにもつながります。そのことが次なる新たな課題の解決へと向かう動機付けとなり、この小ステップを積み重ねていくことで、「よりよい生活とは何か」という大きなテーマに発展していくと考えます（資料1）。

授業においては、課題解決学習を充実させ、「もっとよりよい方法があるのでは」「他の視点もあるので」と問いを深めたり、「自分の生活ではどう実践すればよいだろうか」と問いを具体化して考えたり、さらに発展させて「生活をより豊かにするには」「よりよい生活とは何か」と夢中になって問い続ける生徒の育成を目指したいと考えます。

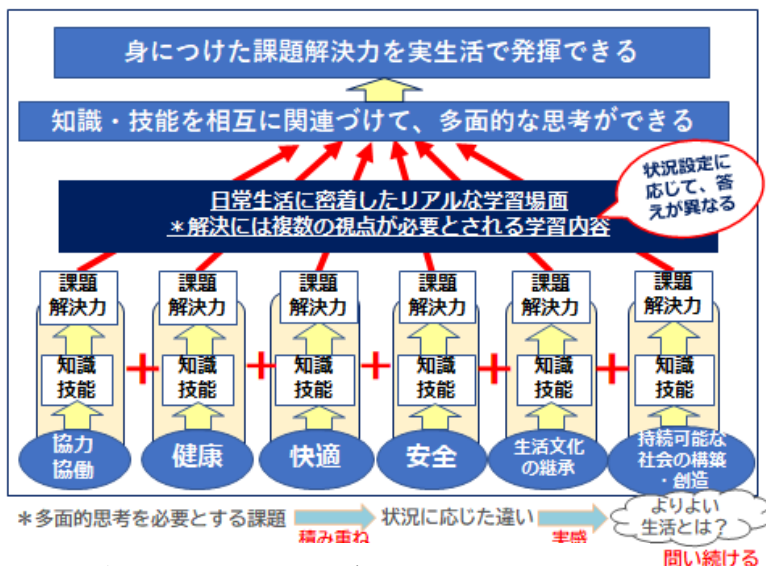


資料1 家庭分野が目指す「問い続ける姿」

2 「夢中になって問い続ける生徒」を育成するために

(1) 課題設定の工夫

夢中になって問い続ける生徒を育成するには、日常生活の問題を問いとして捉え、解決のために主体的に取り組むことができるように、授業における課題解決学習を工夫することが重要となります。実生活と関連した現実的な内容を課題に設定することで、日常生活における問題を「生活をよりよくしていくための問い」と捉えやすくなると考えます。さらに、生徒が主体的に取り組むために、解決したいと思う興味深い内容や、解決



資料2 実生活と結び付けるための課題設定

に向けて多面的思考を必要とする内容にすることが重要です。また、問いの解決には、事前に知識や技能の確実な習得と相互に関連づけた深い理解を促す学習を充実させることが必須となります（資料2）。

例えば、安全な住まいの授業において、災害が多い熊本で生活することに不安を抱く転入生に、アドバイザーとなって防災提案書を作成するという課題を設定しました。生徒たちは、提示される資料に釘付けとなり夢中になって取り組む姿が見られました。より多くのアドバイスをしようと、グループでの話し合い活動も積極的なものになりました。また、衣服の選択の授業において、インターネットでTシャツの購入について友人にアドバイスをするという課題を設定しました。習得した知識を活用しながら工夫して思考、判断しようとする意欲的な姿が見られました。また、他者と意見を共有する協働的な学びを通して、「他の視点を取り入れたら、もっとよりよい選択方法が見つかった」と問い直す場面も見られました。

(2) 見方・考え方を働かせるための工夫

生活における課題解決の場面では、家庭分野の「見方・考え方」を働かせることが重要となります。また、状況に応じて答えが異なる家庭分野の学習において、自分で導き出した解決策の方向性が正しかったのかどうか、その判断基準として各々の中で働かせるものが、「見方・考え方」ではないでしょうか。夢中になって問い続ける生徒の育成という視点においても、「見方・考え方」をより豊かで確かなものに鍛えていく必要があると考えます。

① 「見方・考え方」獲得のための手立て

授業最初のオリエンテーションで、「家庭分野のテーマ」と「見方・考え方」について説明しました。そして、学習の振り返りの場面では、授業を通して考え学んだことと、考えを導き出すために用いた視点をシートに記入させることにしました。また、自分が用いた視点は、家庭分野の「見方・考え方」に示される視点のどれにあたるのか考えさせ、指定されている色の丸型シールを貼らせています（資料3）。この活動によって、生徒自身がどのように物事を捉えたのか、どのような「見方・考え方」を働かせたのかを可視化することができ、自覚と意識化につながると考えています。また、多面的思考を促す効果も期待できます。

家庭科テーマ 「よりよい生活」とは何だろうか？

よりよい衣生活とは？

月日	学習内容	授業を通して考えたこと、学んだこと	どんな視点で？	見方シール
5/15	衣服の役割	自分たちの生活にどの程度役立っているかを考える。自分たちの生活や好きな色、季節によって着るべき衣服が違っていき、自分たちが着たい衣服を着たい。	快適さや個性	●○●
5/20	自分らしい服方 コーディネート、私服	友達の影響やSNSの影響も見て、自分たちが着たい服を着たい。自分たちが着たい服を着たい。自分たちが着たい服を着たい。	デザインやコーディネート の個性	●●●●
5/26	不要な衣服の活用①	花嫁が出た服をどのように活用すればいいかを考える。自分の衣服がどのように活用すればいいかを考える。	衣服のデザインや色 等	●●●●
5/27	不要な衣服の活用②	自分や友達の花嫁の衣装をどのように活用すればいいかを考える。自分の衣服がどのように活用すればいいかを考える。	衣服の種類、色	●●●●
6/1	取り扱い表示	衣服の種類、洗濯の仕方や取り扱い、自分の衣服をどのように取り扱えばいいかを考える。	多様な 服の大きさ	●●●●

●協力・協働 ●健康 ●快適 ●安全
●生活文化の継承・創造 ○持続可能な社会の構築

資料3 生徒の振り返りシート

② 「見方・考え方」を働かせるための資料の工夫

「見方・考え方」を働かせ、深い学びにつながるために、課題解決学習における提示資料を工夫しました。学習において働かせたい「見方・考え方」を整理することから始めました。

例えば、「安全な住まい」の授業においては、「健康・安全」の視点で考えられるように、住まいの立地が分かる地図や家の間取りと家具の配置が分かる資料を準備しました。また、「協力・協働」の視

教材や資料の工夫



提案したい課題点に●シールを貼る。提案事項を付箋に記入している。

×グループ内での話し合い

- 本棚が危ないので、逃げ道ではないところに置く。
- おもちゃ箱は端に寄せる。
- ピアノなど、家具を固定する。
- 食料の備蓄場所がない。
- ※「健康・安全」の視点
- 高齢者の女性とのコミュニケーションをとっておく。
- 弟を連れて逃げる。
- ※「協力・協働」の視点
- 山などの高台に逃げる。避難所の高校に逃げるのは危険（津波）。
- 土砂災害にも注意
- 川が近くに2本あるので、近づかない（こまめに情報確認）。
- ※社会での知識

資料4 「安全な住まい」授業資料

点で考えられるように、その住まいに住む家族構成や近隣に住む高齢者の自宅を設定しました（資料4）。この資料を通して、学習に必要とする「見方・考え方」を働かせ、課題解決をすることができました。また、この学習を生かして、自分の住まいを同様な視点で分析し、「自分の家は、災害にどう備えたらよいだろうか」と問いを具体化して「わが家の防災マニュアル」を作成しました。

また、「衣服の選択」の授業においては、「健康・快適」な視点で考えられるように、Tシャツの色やデザイン、繊維の種類、取り扱い方を少しずつ変えました。また、「持続可能な社会の構築」の視点で考えられるように、価格を少しずつ変えました（資料5）。提示された選択肢から1つを選ぶという活動を通して、生徒たちは「見方・考え方」を働かせながら、それぞれの特徴を比較して考えました。デザインや価格のみで判断せずに、繊維の種類や取り扱い方など習得した知識を活用して深く考え、意思決定することができました。答えが1つではない課題を

資料5 「衣服の選択」授業資料

熟考することで、生徒たちは自ずと「よりよい選択」ということを意識して考えることができました。最後に、「よりよく衣服を選ぶとはどういうことだろうか」「どれを選ぶのが一番よいのだろうか」と発問すると、さらに深く思考することができ、「おそらく、どれが正解ということではない。その人や目的、状況に合わせて考えて選ぶということではないか。」という考えをもつことができました。さらに、「これから、どのような選び方をしていくべきか」と問う姿も見られました。このように、課題や資料、発問を工夫することで、「衣服選択の際の留意点」を学ぶことに留まらず、習得した知識を活用することの必要性を実感したり、「よりよく」を意識した考え方をしたりすることに発展したと考えます。

このような課題解決学習を各題材に設定し、「見方・考え方」を働かせて解決するという小ステップを積み重ねていくことで、「よりよい生活とは何か」を夢中になって問い続けられる生徒を育成していきたいと考えています。

<主な参考文献>

文部科学省：中学校学習指導要領解説技術・家庭編，2018
丸山早苗：中等教育資料 12月号 No.1003，文部科学省，2019
鈴木明子「コンピテンシー・ベイスの家庭科カリキュラム」，東洋館，2019
ハル・グレガーセン：「問いこそが答えだ！」，光文社，2020
熊本大学教育学部附属中学校：令和元年度研究紀要，2019